

「長岡京大内裏附近遺物分布図」と 長岡宮の初期復元研究

國 下 多 美 樹

はじめに

本稿で取り上げる「長岡京大内裏附近遺物分布図」(縮尺1/3,000)は、1954年(昭和29)版京都市都市計画基本図に長岡宮城と条坊、朝堂院の推定線、礎石ないし根石、瓦、砂利敷、凝灰岩、埴輪の出土地を朱色で表示、印刷された考古資料の出土分布地図である(図1)。この分布図の存在は早くから知られていたが、ひろく認知されたのは地図が作成されて32年後に刊行された『長岡京古瓦集成』に付図として添付され、「長岡京大内裏附近遺物分布図の作成まで」と題した解説文の掲載によってであった。⁽¹⁾

この図を作成し解説文を執筆したのは長岡京跡の発見に尽力した歴史地理学者、中山修一氏(1915-1997)⁽²⁾である。1956年秋頃、京都大学地理学教室の小野三正氏に依頼して製図印刷したとされる。現存する地図は、左右54.5cm、天地78.0cmの縦長の上質紙に多色刷りされたもので、長岡宮域一帯の条坊を復元し、考古学的情報を集めた重要な歴史資料といえる(以下、中山図と呼称)。

古代都城である長岡京跡の宮域推定地は、1950年代後半の著しい宅地開発によって地形が改変されている。従って、中山図は、長岡京当時の旧地形や遺構の復原、瓦の出土地比定などに有効なものと理解され、その後の調査と研究に大いに貢献した。⁽³⁾

中山図には、朝堂院南門の第1回発掘成果が明確に記され、大極殿や朝堂院も推定されているから、朝堂院南門の成果を受けて宮殿復元のために作成された地図資料と思われるが、当時の研究者が長岡宮をどのような都と考えていたのかという認識についても知ることもできる。しかし、残念なことに、これまで地図資料に対応する解説文は、上述した中山図の簡単な解説文に限られ、活用が困難な側面もあった。こうした状況のなかで、今から9年前、新たな解説文が発見され分析を行う機会を得た。



長岡宮の初期復元研究(國下) - 47 -

本稿は、中山図と各種の解説資料を読み解き、最新の調査研究成果と対比することで長岡宮跡解明の道程を考え、さらにその後発見された朝堂院復元図についても言及しながら、長岡宮跡の初期復元研究の過程を検討することを課題とするものである。

1 中山図の凝灰岩・礎石・砂利敷分布情報の分析

1-1 「長岡京大内裏附近遺物分布図の作成まで」記載の前提

後に、中山解説が発見されるまで、中山図の作成に至る経緯や解説は、長岡京出土古瓦を集成した『長岡京古瓦集成』に中山修一氏によって寄稿された文章が唯一のものであった。まず、やや長いけれども、作成経緯にかかわる部分を引用することからはじめよう。

長岡京大内裏附近遺物分布図が、当時京都大学地理学教室で、地図の描き方を指導していた小野三正講師に依頼して、1956年（昭和31年）秋頃に製図印刷してもらったもので、礎石または根石、砂利敷、凝灰岩、はにわの出土地と条坊の推定線及び布目瓦の出土地が記入されている。

今から考えてみると条坊や大極殿の位置は大分間違っている。当時は会昌門の位置と大内裏図考証の復元図しか知られていなかったのも、そのような図になったのである。ただし遺物の出土地や地上散布図は図化後30年間に爆発的にふえているが、ここに記入しているものの場所は変わっていない。

昭和29年頃は、“長岡京など掘っても、何もでないだろう”というのが一般の常識であった。ところが、“掘れば瓦や礎石が見つかる”と教えてくれたのが、私の教え子の袖岡正清君と下村邦夫君であった。

聞けば下村君の家（所在地略、筆者加筆）で自動車の練習場を作ろうとして、後の敷をならしたら、礎石とたくさんの布目瓦を出土したという。そのほかにも瓦の散布している所が各所にあるという。なるほど下村君の家にはビール箱に3箱分ほどの軒丸瓦や軒平瓦が、ぎっしりと詰まって保存されていた。また阪急西向日駅の東方の日東薬品の正門西の断面には、たくさんの布目瓦の破片がみえていた。

以前から聞き込みをしたり自分自身で旧乙訓郡内のめばしい所の竹藪の中や溝の側面などを調べ回って、多くの成果を挙げていた袖岡君に一層精をだして、向日市鶏冠井町、上植野町、森本町や寺戸町の聞き込みや探索

を頼んでみた。私もそれなりに色々な人々に聞いて回ったが初期の分布に関する調査は袖岡君の努力に待つところがほとんどである。袖岡君は広範囲に探索の眼を配ってくれた。(以下、略)

この文章が寄稿されたのは、1987年(昭和62)であるから、中山図が作成されて31年を経過してから解説していることになる。当時の状況を回顧しながら文章化しているのである。この記載から、中山分布図の作成時期が1956年秋頃という長岡京が発見され公表された翌年であることが明らかになる。長岡京跡の存在がほぼ認識されていなかった当時、教え子等から考古資料の発見、採集の報を受け、一般の意識を変える契機となると考えて作成することになったことが知られるのである。

「長岡京大内裏附近遺物分布図の作成まで」は、上記引用文に続けて、図中の一～二八地点の発見状況を略述している。

しかし、この中山がなぜこれほど精緻な図を依頼までして作成する必要があったのか、考古遺物の発見事情についてのさらに詳細な内容がないか、など疑問を残していたのである。

2013年4月、中山修一氏宅に保管されていた未刊乙訓郡史の原稿原本が関係



図2 中山修一氏未公表原稿(中山解説)、左:原稿②、右:原稿①)

者の調査により確認された（図2）。そして、その後の資料整理の過程で、郡史の原稿とともに、未公表の長岡京跡関係原稿2部（仮に原稿①・②と呼称）が含まれていることが新たに確認された。原稿①は中山修一氏以外が清書したもの、原稿②は中山修一氏の筆によるもの（以下、①・②を合わせ中山解説と呼称）と明らかになっている⁽⁴⁾。この中山解説は、向日市文化資料館でデータ入力されるとともに整理され、その意義を考えるべく筆者を含めた関係者で検討する機会をいただいた。その折には、向日市文化資料館、長岡京市立中山修一記念館でも一般公開され、現在は長岡京市教育委員会が保管している⁽⁵⁾。

残念ながら、この翻刻と解説などについての正式な報告は未だされていないけれども、中山図に記載された考古学的データの重要性は高いので、地図資料と今明らかにできる情報を提供しておきたいと考えようになったのである。

1-2 中山図を読む

中山図は、図幅の左上欄外に、「附図第二」とある。中山解説の存在から、本来、乙訓郡誌に付載する予定であったと推測できる。想像をたくましくすると明確になっていない附図第一は、長岡京復元図であろう。

基本地図は、初版が1925年（大正14）、修正版が1936年（昭和11）に刊行されたが、1954年（昭和29）に新版が出版され間も無い地図が選定されている⁽⁶⁾。1987年の中山図の解説に拠れば、当時京都大学地理学教室で、地図の描き方を指導していた小野三正講師（当時）に依頼して作成し、基本地図は薄鼠色、遺跡情報、条坊復元、宮殿配置、地名は、朱色で印刷している。

まず、条坊図は、平安京をモデルとしている。平安宮は、京程条の記載から計ると、東西384丈、南北460丈となる。中山図に示された宮域のおよその距離は、東西1132m（377丈）、南北1350m（450丈）で、一尺0.3mを基準尺として、平安京型で復元された。地図の実測値が復元値と一致しない理由は判然としないが、京条坊は、40丈四方の宅地を配置しているので平安京と同様の計画であるとみて復元されている。

宮域の設定の定点は、朝堂院南門跡（平安宮会昌門相当）の発見にある。1954年（昭和29）暮から翌年1月にかけて行われた長岡京第1回発掘調査で、凝灰岩切石で基壇化粧された総柱の礎石建物が確認され、これが朝堂院南門と推定されたことが宮復元の大きな契機となった。調査は、京都大学考古学研究室梅原末治氏の指示で樋口隆康氏の指導のもと進められたが、これが平安宮会昌門に相当する門であることは、文化庁から京都大学建築史学に戻り教鞭を

とっていた福山敏男氏の判断があったらしい。

朝堂院南門の確認で宮域の東西中軸を明確にできたことは、その後の復元研究にとって大きな布石となった。これをもとに朝堂院中軸を求めて大極殿の位置が推定された。中山図の推定大極殿は、後に発掘調査によって南60mの地点に所在することが判明した。中山図には、長岡京と関連すると考えられた古地名も記されている。「長殿」、「荒内裏」、「醬院」、「厨」、「右馬寮」、「鴻臚寺」である。「長殿」は大蔵跡を想定したもの。荒内裏は、「荒内」地名に基づく。平安京に遷都され荒廃した内裏の跡、醬院は、宮内省大膳職関連施設である。「厨」は某官衙の推定であろうか。「右馬寮」は、地名「馬立」から推測された官衙名、「鴻臚寺」は、条里地名に残る「こうろ」から推定されたものである。そして、京条坊の存在を予測した地でもある「蓮池」記載もある。地名そのものと解釈が混在しているが、中山図には、当時の情報を極力網羅したいという意図が現れている。

さて、図中には、長岡宮に直接関連するであろう、礎石又は基礎（根固石）、瓦、砂利敷、道路輪郭、凝灰岩のほか、埴輪も記載されている。これらの遺物は、中山修一の教え子たちによって蒐集されたものが多かったらしい。

礎石又は基礎（根固石）は、主に礎石建物の基礎として利用された大型石材をイメージさせる。宮内の調査では、大極殿、朝堂院、官衙正庁などの中心施設は、礎石建ち瓦葺き建物であることが明らかになっている。

凝灰岩は、礎石建物の基壇や溝の化粧石に利用された宮殿の石材であろう。礎石建物は、壇上積み基壇であることが一般的であるが、その多くは廃都に伴って抜き取られ移動したことが多い。この時に取り残された地覆石が確認されるか、再加工されたものが地表に現れたものと推察できる。砂利敷は、石敷きや地盤改良のように、それだけで遺構としての性格を特定することは難しいので、周辺の遺構との関係が大事になる。

埴輪は、直接、長岡宮と関連するものではない。宮内の調査では、下層から大極殿古墳、山畑古墳群、御塔道古墳、西ノ段古墳、西小路古墳、南小路古墳など、宮殿の造営によって削られた埋没墳が確認されている。埴輪はこれらとの関係を暗示する資料である。

1-3 最新成果図との合成の成果（図3）

中山図は、その他の復元図と異なり縮尺も整って図解も精緻なものであるから、最新の成果とかなり高い精度で比較できる（図3・4）。

図4は、長岡宮の中樞施設の調査成果を表示した「長岡宮遺構分布図⁽⁷⁾ 1/2,500」に中山図の成果を合成したものである。一方、中山解説には、凝灰岩の出土地点はアルファベット（A・B・・・）、礎石はひらがな（あ・い・・・）、砂利敷はカタカナ（ア・イ・・・）で区別して表記されており、中山図と対照できる形式になっている。

先に述べたように、礎石は瓦葺き建物の柱基礎、砂利敷は、石敷きなどの舗装や地盤改良の存在を示す暗示する資料になることを前提に特徴的な地点の成果をみておく。

宮城中心部の成果

〔朝堂院南西部「凝灰岩A・B」地点〕 朝堂院南門の真西、朝堂院西方官衛に位置する付近2箇所⁽⁸⁾で凝灰岩が確認されている。

「凝灰岩B」地点は、後に京都府教育委員会によって調査された場所に当たる（B地区2次、宮第11次調査）。長さ67～88cm、幅36～46cmの凝灰岩地覆石が一行に組まれていたことが明らかになった。さらに隣接地を継続調査した宮第28次（B地区5次、宮第28次調査）で礎石建ち門の北東部と確定した⁽⁸⁾。

つまり、凝灰岩の確認が門SB2800の発見につながったのである。「凝灰岩A」もこの門に関係する可能性が高い。その後、門の北東部が調査され（宮第267次⁽⁹⁾）、門から北に延びていた築地SA2810は東からの築地SA26700と横T字形で交差していることがほぼ確定するなどの重要な成果が得られている。また、築地基底部下に大型の土坑があり、多量の難波宮式軒瓦が出土し、長岡京の造営過程を知る重要な資料となった。

なお、この門に取り付く南北築地は、朝堂院中軸線を中心に東に折り返すと史跡築地跡と一致する。朝堂院南面区画を形成することも明確になったのである。

〔朝堂院西方「凝灰岩C・D」地点〕 朝堂院西方官衛に推定される地点で凝灰岩が出土している。「凝灰岩C」の成果は、門SB2800の北に取り付く南北築地がさらに北方に延長されていた可能性を指摘できる成果である。「凝灰岩C・D」地点は、のちに宮第480次として調査されたが、築地の痕跡は一切削られて痕跡すらとどめない状態であった⁽¹⁰⁾。

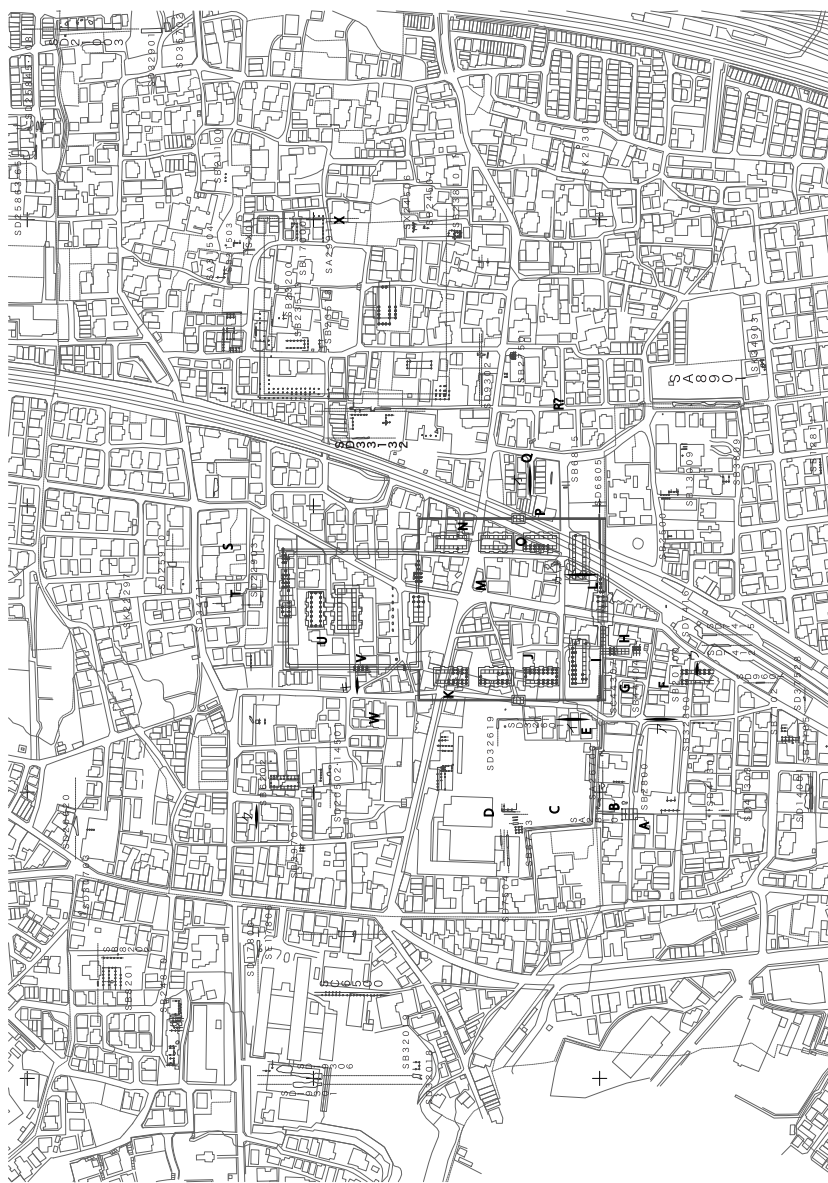
しかし本来は、この位置に築地基底部が連続して存在していたと考えられ、昭和期の運動場造成によって完全に削平されたことになる。また、「凝灰岩D」は礎石建物SB970801に伴う可能性を示唆する。この官衛域の性格は今後の課題であるが、礎石建物を築地で囲み院を形成していたことを示すものと言

The distribution map of the remains found in the Imperial Palace site at Nagaoka-kyo

＜北一條桑間小路＞



長岡宮の初期復元研究(國下) - 53 -



える。あるいは、平安宮豊楽院相当施設があったのであろうか。

〔朝堂院南方「凝灰岩F～H」地点〕 朝堂院南面区画に推定される。「凝灰岩F・H」は官衙区画内の礎石建物に関係する可能性がある。

まず、「凝灰岩F」は南北棟礎石建物SB20100に近接して出土しており、その基壇化粧にかかわるものであろう。礎石建物SB20100は太政官院の朝堂と同一柱間寸法をもつ南北向き両面庇付き建物で、しかも西第一堂から第四堂までの西側柱列と位置を揃えて建造されている。朝堂が建設、完成し百官が初めて朝座したと『続日本紀』に記された延暦五年（786）頃までの長岡宮初期の造営と推測される。この建物は、全体の整地と礎石根固めの構築を同時に行う円丘盛土工法⁽¹¹⁾で、朝堂院諸堂の造営法と類似することも長岡宮初期の造営であることを証左する。この建物は、平安宮との対比では西朝集堂の位置に近い。「砂利敷う」は、この礎石建物付近で確認されているから、これに関係するものかもしれない。

「凝灰岩H」は、朝堂院南門の南西、西楼閣のすぐ東側に推定される。朝堂院南門は、左右二つの楼閣を回廊でつなぐ、門闕様式であることが確定している。この回廊基壇に係わる可能性がある。「凝灰岩G」の近くで採集され、京都大学に保管される経緯をもった鬼面文鬼瓦も西楼閣の西側付近から出土している⁽¹²⁾。「凝灰岩H・G」はこれらの資料とともに西楼閣に関係するものとして再評価できよう。

〔朝堂院内「凝灰岩I～O」地点〕 これらは朝堂院地区の朝堂や回廊など瓦葺き建物の基壇化粧に係わるものと推定される。まず、注目される成果は、朝堂院南門に関係する「凝灰岩L」は、中山解説によって一部が現地から移動していることが明記されている。このうち「坊主池に投げ込まれた」と伝わる凝灰岩は、大極殿院南門前における2006年の宮第452次調査⁽¹³⁾で池堆積から凝灰岩切石が出土しており、これと一致することが判明した。朝堂院南門の調査写真⁽¹⁴⁾には、基壇地覆石の存在が見えるが、その他の化粧石についての行方を知る情報となる。朝堂院南門は、1954年暮れから、中山修一、袖岡正清の両氏によって発掘が始まり、翌年、福山敏男、樋口隆康の両氏が指導に加わって本格的な調査となった。

また、「凝灰岩I～K・N・O」は、朝堂院における朝堂の存在を裏付ける成果になる。朝堂院は、発掘調査によって八堂形式の朝堂が左右対象に配置されたことが明らかになっている。しかし、調査した結果の朝堂の遺存状況は、基壇がほとんど失われ、根石と地覆石痕跡が残る程度で決して残りが良いわけ

ではない。東・西第一堂から三堂は、梁行4間、桁行7間の両面庇付き礎石建物、東・西第四堂は、梁行4間、桁行10間の両面庇付き礎石建物に復元されている。これら諸堂は、大極殿とともに後期難波宮から移建されたことが明らかになっている。⁽¹⁵⁾ただし、後期難波宮の朝堂院配置と比較すると、東西第四堂が東西それぞれに築地側に移動して東・西第一～三堂の外側柱列を揃える再配置をしたので、結果的に南門前の朝庭を広く確保したという変化があった。

なお、「礎石け」は、朝堂院南面築地に沿って礎石が確認されているから築地寄柱の可能性が高い。この地点は、その後も敷地境界となったから築地基礎を確認することはかなり難しい。

〔朝堂院東方「凝灰岩P～R」地点〕 朝堂院の東方、東外郭に相当する。特に、「凝灰岩R」地点は、後世の土取り造成によって数m以上削られ、完全に当時の生活面をとどめない場所であるから往時の土地利用を知る貴重な記録になる。「R地点」付近は、現在、南北に延びる道路地割りが残り、南方の築地SA8901位置と概ね重なることから、この付近にも存在していたとみられてきた。この推測を裏付ける記録となるかもしれない。

南方の築地SA8901は、築地遺構が本体とともに残されていた。この位置は、上述した朝堂院南西の門SB2801を朝堂院中軸線で東に折り返した場所に当たる。この東西の築地間と西築地と東西溝SD14001・02で復元された南辺築地⁽¹⁶⁾によって、東西358m（約1209尺）、南北180.86m（611尺）というおよそ600尺を基準とする区画が推定でき、「朝堂院南面区画」と呼称されている。

朝堂院南面区画は、内部の調査は進んでいないけれども門闕構造を有する朝堂院南門をこの区画内の北面に置いて、内部に礎石建物を配置した特殊な空間と考えられる。都城の基本設計となる条坊との関係性は強く、当初から計画された特別な区画であった。⁽¹⁷⁾奈良時代の平城宮、後期難波宮、平安宮にもないので、長岡宮の宮殿構造の特殊性をよく示す空間である。

〔大極殿院北方「凝灰岩S・T」地点〕 大極殿院のすぐ北東に位置する。「凝灰岩S・T」地点は、ちょうど後に宮第229次調査が行われ、凝灰岩・瓦片を含む溝の存在から礎石建物の存在が推定された場所である。つまり、この中山解説は、大極殿のすぐ北に基壇建物が存在したことを確実視できる成果になる。中山地図が作成された当時、この地点の成果は、真の大極殿の位置を特定するために使われた点は注意して良い。「凝灰岩S・T」地点を結んだ線が「恐らく、朝堂院回廊の北端にあたる部分であり、其の南の中段を、廟堂、最上段を大極殿の位置と推測する」（中山解説、「朝堂院」項）として大極殿院の根拠と

して使われた。結果的に、大極殿の正しい位置はその後の発掘調査でさらに南方の地点であることが明らかになるわけであるが、「長岡宮大極殿遺址」碑近くに大極殿を推定する根拠として、考古学的な成果が使われたのである。

従来、真の大極殿を探索する決め手は、「大極天（小字名）の畑のゴボウはよく採れる」という伝聞や、明治6年（1873）の鶏冠井村古地図に残る「大極天」地名に拠ったとされてきたが、これに加えて朝堂院南門の調査以降の考古学的な資料の収集と検討、そして地形条件など、総合的分析によって特定に結びついたことがわかる。

〔大極殿院「凝灰岩U・V」地点〕 大極殿院に相当する。まず、「凝灰岩V」は、西回廊が発見された宮第255次地点⁽²⁰⁾に近接し、回廊に伴う基壇化粧の可能性はある。大極殿院回廊は、礎石建ちの複廊である。

「凝灰岩U地点」は、大極殿と後殿の西側付近とみられる。この凝灰岩の性格を特定することは困難であるが、後世の土砂移動によって大極殿や後殿の化粧石が西に移動したか、何らかの施設を想定しておきたい。

〔大極殿東方「凝灰岩X」・「礎石い」地点〕 大極殿の東方にある、内裏「東宮」の東面築地回廊付近に当る。同じ場所から「礎石い」が確認されている。これまでの調査成果から、内裏の建物の大半は掘立柱形式で、礎石建は築地回廊に限られることが明らかになっている。従って、「凝灰岩X」・「礎石い」は、最も近い東面築地回廊に伴うものと推定して良いであろう。

宮城北部と南部の成果

〔朝堂院北方「礎石う」地点〕 朝堂院北方官衙に推定される。寺戸町東ノ段は東向きの傾斜地であるが、大きな礎石建物が発見されている地域である。

「礎石う」地点の同一敷地南部では、宮第483・485次調査によって南北棟礎石建物SB483001が確認された⁽²¹⁾。梁間10尺、桁行14～15尺の両面庇付の大型建物である。建物の延びる方向からみて「礎石う」はこの建物に伴うものか、関連する礎石建物とみてほぼ間違いない。一連の発掘調査では、根石しか確認できていないから、本来自然石を利用した礎石であったことが推測できる。この礎石建物は、平安宮豊楽殿や宮内省正殿など曹司政庁の殿舎と柱間など同一規模であることが指摘されているが、具体的な官衙名を比定することは難しい現状である。

〔北辺官衙「礎石さ」地点〕 宮城の北部、北辺官衙の大蔵推定地に相当する。私立西山高校（現京都西山高校）の所在する一帯は、体育館建設の際の宮第

124次調査で倉とみられる礎石建物と石組溝、池が発見され、「大蔵」跡と推定された。「礎石さ」地点は、この「大蔵」関連施設の南方に別に一棟の礎石建物があつたことを示唆する。「大蔵」は、『倉庫令』から、倉を並列した「並び倉」を想定できるが、実際の調査では倉は1棟しか確認できていない。南部にも倉を設けていた可能性があり、大蔵のイメージを具体化できる新たな資料になりうるものであろう。

〔朝堂院南面「凝灰岩Y」「砂利敷工」〕 朝堂院南面区画と南で接する官衙の東寄りに相当する。道路下から発見された砂利敷・凝灰岩は南北棟礎石建物SB9701に関係する遺構とみてほぼ間違いない（註23・24）。同建物は、東西4間、南北7間以上の朝堂規模の可能性が考えられている。

1-4 小結

以上、中山図の分析から明らかになった点を整理する。

- 1) 1956年頃に作成された「長岡京大内裏附近分布図」の作成過程を振り返り、中山修一氏が乙訓郡誌の附図として作成したものであると明らかになった。
- 2) 現地の踏査を踏まえた考古資料の分布とベース地図の精度は高く、国土座標を用いた現代の遺跡・地図情報と十分に比較できる重要な歴史資料と評価する。
- 3) 作成にあたっては、教育者中山修一氏の教え子を中心に地元の多くの市民が参画し、地名や伝承のみならず、考古学的情報が大極殿をはじめ宮城中枢部の発見に導くことになることを改めて確認できた。1955年の第1回発掘調査以降、採集遺物の成果を総合化して遺跡を解明しようとする状況を読みとることができる。
- 4) 「長岡京大内裏附近分布図」に記載された考古資料の分布について、その後の成果も踏まえた資料の性格を検討した。特に、宮殿中枢部と礎石、凝灰岩の分布は、その後の発掘調査によって発見された礎石建物や築地などの建築との直接的な関係を暗示するものであり、主要施設の存在を追認できる成果となった。

2 長岡宮の初期復原研究

ところで、長岡京の研究史上、初期の宮殿の復原がどのような手続きを経て進められたかについて、詳しい情報は多く残されていない。1973年、京都府教育委員会の文化財技師であつた高橋美久二氏の依頼で、中山修一氏は、「長岡

京発掘調査の歴史⁽²⁵⁾」を執筆した。長岡京の復元に際しては、まず長岡京全体を地図上で復元を行ったこと、そしてそれ以降、朝堂院区域、内裏区域、大内裏内諸官衙、京域内へと調査によって解明が進んだと書き残されている。しかし、長岡京の図上復元の具体的な過程については、それ以上に詳しい説明が書かれていない。この点を考える資料が「中山地図」や中山解説である。この2点が揃ったことで、現状での長岡宮の復元過程は次の3段階で整理できそうである。

長岡宮復元図1953～1954年 2010年、乙訓文化遺産を守る会の坂下勝美氏の自邸でこれまで存在が知られていなかった、中山修一氏作成の長岡宮復元図⁽²⁶⁾が発見された。どのような経緯で坂下氏が保管されたのかは明確でない。現在、長岡京市教育委員会所蔵である。縦69.8cm、横54.5cmの長方形のトレーシングペーパーに道路、川、鉄道を黒鉛筆で、長岡宮の復元ラインを赤鉛筆描きされる。「縮尺三千分ノ一」と記載される。

この復元図は、平安宮大内裏図を参考に描かれ、阪急電鉄よりも東側に朝堂院を想定したものである。作成年代は、年代や作成者が書かれていないから不明であるが、最初期の朝堂院復元案の可能性が極めて高いと考えられる。中山解説に拠れば、1955年の発掘で確認された門が朝堂院南門（当時、会昌門と呼称）なのか、豊楽殿の正門である儀鳳門なのか、「中山解説」のなかで丁寧⁽²⁷⁾に検討している。豊楽院の項では、「嘗て、朝堂と推定したところを豊楽院とし、朝堂を東へ持って行っただろうかと考えた事もあった」と述べていることから、この復元図が当初の案であることが裏付けられたことになる。西向日駅の北方に、後に朝堂院南門とわかる礎石が表示されている。この復元は、宮城西端を段丘から丘陵にいたる傾斜変換に置いていることから、地形を意識して推定したものであることがわかる。乙訓郡史の執筆を依頼された1953年から1954年までの2年間のうち、比較的新しい時期に作成されたものと推測する。

長岡宮復元図1954～1955年 中山図の作成直前の頃の復元図と推定される。古い段階の線・文字は朱色、新しい段階の線・種は、桃色で描かれる。宮に近い京条坊も朱色の線と文字で復元されている。朱雀門の位置は、長岡宮復元図1953～54年の東に推定されていた初期の段階を踏襲しているが、途中で復元線が止まる。

中山修一氏は、1955年に長岡京第1回の調査で総柱の礎石建物が確認されたことを契機に、平安京遷都1100年記念事業で建てられた推定大極殿の位置（「長岡宮城大極殿遺址」石碑）について疑問をもつようになった（中山解説「緒言」）。新しい長岡宮復元図は、前年の復元図を西に大きく移動させた。

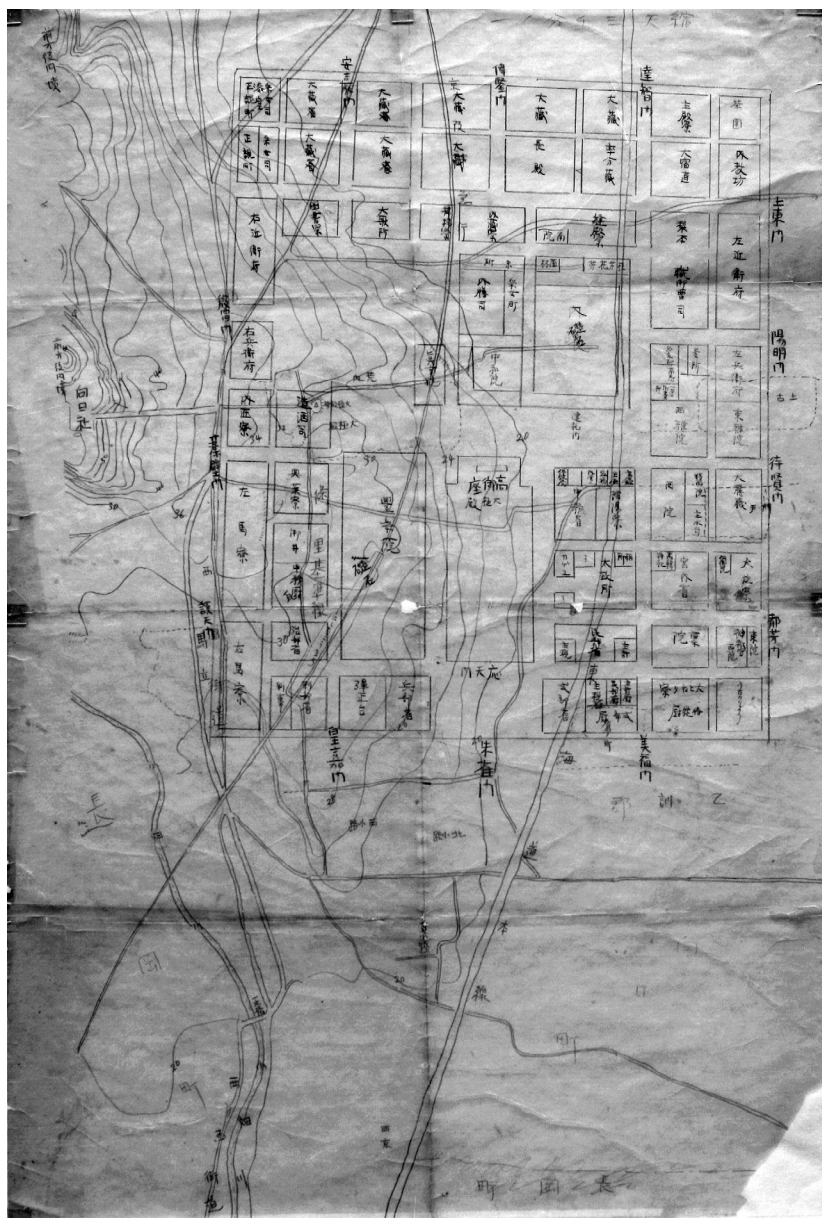


図5 長岡宮復元図1953~1954年

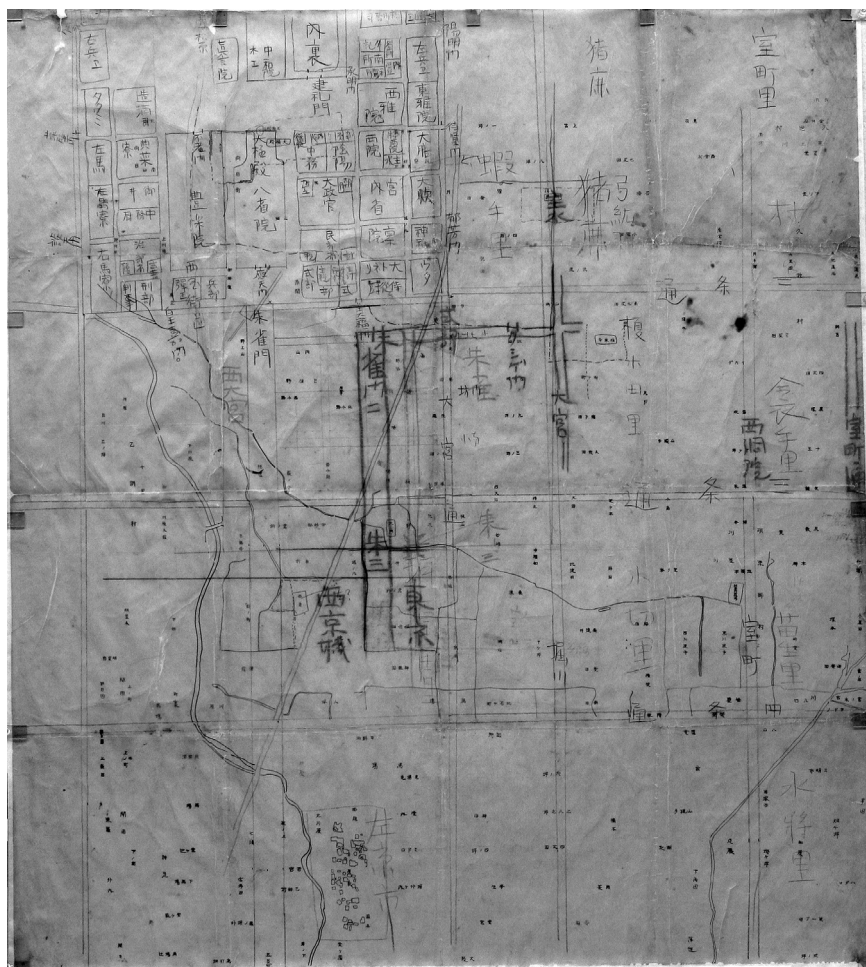


図6 長岡宮復元図1954～55年

応天門推定地附近に北東から南西向きの礫敷き状の鉛筆線が表現されている。朝堂院南門の探索のための最初の調査坑かと推定される。これが正しいとすれば、1954年までの推定図ということになるが確定しない。中山図の作成過程では、大極殿を旧来の位置の南東70mに推定するに至った。その根拠は、朝堂院南門の発見により朝堂院中軸線が明確になったからであり、最も高所にあたる

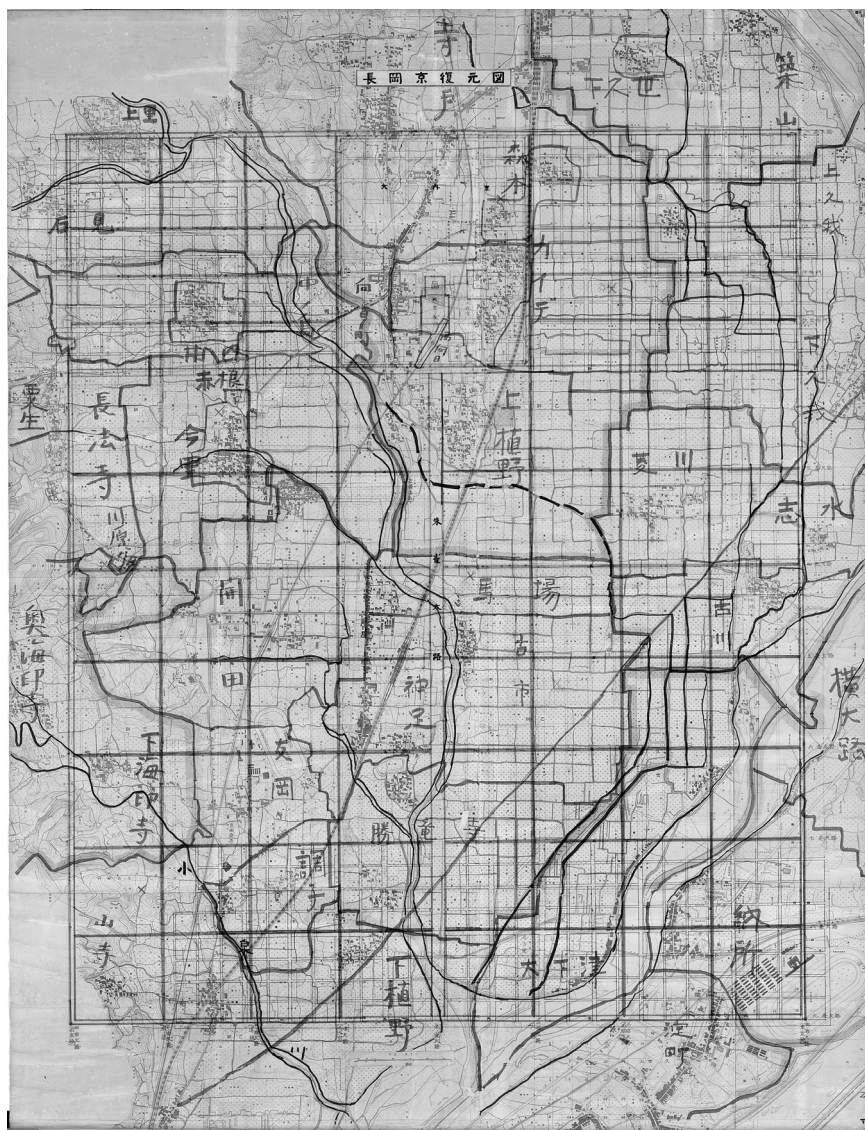


図7 長岡京復元図1961年以降

地形条件、中山図・中山解説を根拠とする考古学的情報にあった。

長岡宮復元図1961年 1959年に大極殿院北門である昭慶門と北回廊、東回廊を確認（C地区）、1961年に大極殿（H地区）、小安殿（G地区）が確認され宮の中心施設である、大極殿院の位置が確定した。同年の福山・西川両氏の日本建築学史の論考⁽²⁷⁾には、朝堂院南門との関係図が極めて明確に記されている。大極殿、小安殿など宮城中枢施設の発見は、長岡宮の中軸線を得ることになり、長岡宮復元図の定点となった。

中山修一記念館に保管、展示されている長岡京条坊図（図7）は、この頃の製作と推測される。1936年（昭和11）の地形図（1/3,000）に長岡京の条坊を赤色で、大字名と境を緑色、条里を黒で手書き復元している。また、復元の定点となる大極殿跡（1961年調査）、1953年秋に京復元の根拠とした『類従三代格』⁽²⁸⁾記載の左京三条一坊十町跡を黄色で表記する。大きさは、縦220cm、横165cm。宮域の復元をもとに京域全体が復元されている。

3 まとめ

「長岡京大内裏附近遺物分布図」は、精緻な成果図であるがゆえに、近年の調査データと比較できる歴史資料である。「中山解説」の発見によって、長岡宮域における遺物採集地点の具体的な内容が明らかになり、その後の発掘調査で明らかになった遺跡実態とも大いに相関していることが明らかになる。1950年代以降の開発によって地形改変著しい宮殿域の往時の姿を再現できる資料として高く評価する。

さらに、新たな初期宮城復元図の発見によって、地名による推定のみならず、地形条件や遺物分布を踏まえた地道な検討と計画的な発掘調査が実態解明につながった。開発による対応という行政的な調査のみでは長岡宮復元には至らなかったに違いない。

要するに、長岡宮跡復元のあゆみは、考古学的情報の成果を丁寧に積み重ねた結果の実証的な積み重ねと条坊復元案を相互に地図上で繰り返し試行錯誤してきた結果なのである。

平安京と同じプランと考えられていた長岡京の条坊は、その後、京内の発掘調査が進み、長岡京独自の条坊をもつことが明らかになった。

2025年には、長岡宮第1回発掘から70年を迎える。かつて、中山修一氏が目指したように、宮と京を行政区分することなく、長岡京跡全体の資料の総合化を進めて、誰しもがアクセスできる情報公開を目指したいものである。

将来の長岡京の学問的研究を考える上で、中山修一氏の業績に学ぶことは多い。

【謝辞】 本稿の作成では、下記の方々、及び機関のご協力を得た、記して感謝申し上げます。

中山忠彦（中山修一記念館）、玉城玲子（向日市文化資料館）、松本千裕（長岡京市教育委員会）、百瀬ちどり（元長岡京市史編纂室）、古閑正浩（大山崎町教育委員会）

なお、本稿は、「長岡京大内裏附近遺物分布図」再考—解説文の発見を踏まえて—と題して都城制研究会（2016年3月26日）で報告した内容に基づく。



1966年頃、山城国分寺で（現木津川市）

図8 中山修一氏(1915－1997)

註

- (1) 中山修一「長岡京大内裏附近遺物分布図の作成まで」『長岡京古瓦集成』向日市教育委員会 1987年 p.p.325-329。
- (2) 中山修一氏は、1915年京都府乙訓郡新神足村（現、長岡京市神足）に生まれた。1949年京都大学史学科卒業。同年大学院進学後、1951年から京都市立西京高校教諭。1953年、地理学教室の吉田敬市氏から『乙訓郡史』奈良時代（長岡京）の執筆依頼を受け長岡京研究を進める。1954年暮れから翌年に朝堂院南門の発掘に着手し、長岡京遺跡の存在を明らかにした。以降、大極殿、内裏正殿の発掘とともに小林清氏らと乙訓の文化遺産を守る会を結成し遺跡の保存にも貢献した。1972年から京都市政短期大学助教授、教授を経て教鞭をとる傍ら、1978年には長岡京の統一的な調査機関として長岡京跡発掘調査研究所を設立して広域遺跡である長岡京の調査研究の拠点づくりに貢献した。研究所解散後は、各自自治体が市域の遺跡調査と保護を引き継いでいる。長岡京跡の発見と遺跡の保護体制の基礎を築いた氏の業績は、長岡京市立中山修一記念館で顕彰されている。

長岡京市立中山修一記念館（長岡京市久貝3-3-3,
公式HP:<https://www.city.nagaokakyo.lg.jp/0000001312.html>）

- (3) 例えば、筆者は、長岡宮第一次内裏「西宮」の所在地を再検討する際に中山図を参考にした。（國下多美樹「長岡宮域と二つの内裏」『古代文化』59巻第3号 古代学協会 2007年 p.345 第3図。）

- (4) 中山修一氏の筆跡は百瀬ちどり氏が確認された。
- (5) 中山修一氏による解説原稿は、向日市文化資料館が未刊乙訓郡史（本来、「郡誌」、中山原稿表記に合わせる）の原稿原本の所在を探索していたところ、中山忠彦氏、百瀬ちどり氏（長岡京市教育委員会、当時）の協力を得て、中山修一氏自宅に保管されていた郡史原本を再確認できた時、同じ箱の中にあることが確認されたものである。これまで未公表の原稿であったため、内容の検討会が行われることになった。2016年4月19日、6月21日、8月30日、10月11日、12月20日の5回行われ、同館学芸員玉城玲子氏を中心に、百瀬ちどり氏、古閑正浩氏（大山崎町教育委員会）、國下が中山解説の分析と意見交換を行った。また、向日市文化資料館で2016年2月6日から行われた歴まち認定1周年記念展示「長岡宮大極殿の発掘と地元の人々」の中でも同月28日まで展示され、期間中の14日には、古閑正浩氏と筆者が成果報告を行った。

現在、中山解説の原本は長岡京市教育委員会が所蔵、保管されているが、翻刻、活字化されたものは未公開である。

- (6) 中山地図と京都大学地理学教室の関連では、元龍谷大学教授山田誠先生にご教示いただいた。
- (7) 「長岡宮遺構分布図（1/2,500）」（財）向日市埋蔵文化財センター年報都城14付図2003年、及び「長岡宮大極殿・朝堂院・内裏地区地形図・遺構分布図（1/2,500）」『長岡宮発掘60周年記念誌 長岡宮発掘60年のあゆみ』付図2015年を基に加筆作成した。
- (8) 『埋蔵文化財発掘調査概要』京都府教育委員会 1970年。
- (9) 秋山浩三「長岡宮跡第267次発掘調査」『向日市報告』第36集 1993年。
- (10) 中塚良「長岡宮第480次発掘調査」『向日市報告』第90集 2011年。
- (11) 國下多美樹「古代都城の礎石建物」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会 1986年
- (12) 朝堂院南面西楼閣の南側推定地にかつてあった土蔵の解体時に鬼瓦が採集され、袖岡正清氏を通じて京都大学に保管されるという経緯があったことを同氏からご教示いただいた。
- これは、『長岡京古瓦聚成（1987）』収載の長岡宮式鬼面文鬼瓦No.7に当たる。同報告では、朝堂院南面築地回廊南方40mの地点（A）の採集地点名となっている。
- (13) 梅本康広「長岡宮跡第452次発掘調査」『向日市報告』第81集 2010年。
- (14) 『長岡宮発掘60年のあゆみ』向日市教育委員会・向日市埋蔵文化財センター 2015年。
- (15) 小林清「発掘調査の成果から、従来の長岡京・平安京（桓武朝）史への批判」『長岡京の新研究』比叡書房 1975年。
- (16) 渡辺博「長岡宮跡第150次発掘調査」『向日市報告』第17集 1985年
- (17) 國下多美樹「長岡宮朝堂院南方官衙の評価をめぐって」『向日市報告』第69集 2009年

古閑正浩「長岡宮における中枢施設の配置と条坊」『難波宮と古代都城』同成

社 2020年

- (18) 國下多美樹「長岡宮第229次発掘調査」『向日市報告』28集 向日市教育委員会 1990年。
- (19) 「明治6年鶏冠井村古地図」『向日市史資料編下巻』附図 向日市 1988年
- (20) 國下多美樹「長岡宮跡第255次発掘調査」『向日市報告』第34集 向日市埋蔵文化財センター 1992年。
- (21) 梅本康広「長岡宮跡第485次発掘調査」『向日市報告』第92集 2012年。
梅本康広「長岡宮跡第483次発掘調査他」『向日市報告』第95集 2015年。
- (22) 宮原晋一「長岡宮跡第124次発掘調査」『向日市報告』第17集 1985年。
- (23) 石尾正信・橋本清一「長岡宮跡第97次発掘調査」『向日市報告』第6集 1980年。
- (24) 國下多美樹「長岡宮跡第434次発掘調査」『向日市報告』第68集 2005年。
- (25) 中山修一「長岡宮発掘調査の略史」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1973年
- (26) 乙訓の文化遺産を守る会事務局「長岡宮初期の復原図」『乙訓文化』76号 2011年。
- (27) 福山敏男・西川幸治「長岡京の大極殿」『日本建築学会論文報告集』第69号 1961年10月。
- (28) 『類聚三代格』卷十五 延暦十四年正月二十九日条。

押図出典

- 図1：『長岡京古瓦集成』（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集向日市教育委員会 1987年）p326掲載図を転載、一部改変
- 図2：『長岡京大極殿の発掘と地元の人々』（向日市文化資料館テーマ展示リーフレット）より転載。原本は長岡京市教育委員会所蔵。
- 図3：『長岡京古瓦集成』（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集向日市教育委員会 1987年）p326掲載図を転載、註7文献掲載図を引用、拙著『長岡京の歴史考古学研究』2013年 図19を重ねて表記。
- 図4：『長岡京古瓦集成』（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集向日市教育委員会 1987年）p326掲載図を転載、註7文献掲載図を引用。
- 図5～7：『長岡京大極殿の発掘と地元の人々』（向日市文化資料館テーマ展示リーフレット）より転載。原本は長岡京市教育委員会所蔵。
- 図8：『長岡京大極殿の発掘と地元の人々』（向日市文化資料館テーマ展示リーフレット）より転載。向日市文化資料館所蔵。

キーワード：長岡京跡、中山修一、遺物分布地図、解説文、初期長岡宮復元